

自然保護上看過ごされがちな問題

渡 辺 千 尚



秋晴れの日、アメリカの昆虫学者を月寒の農業試験場に案内した際、羊ガ丘展望台をおとすれた。

たまたま貸切バスから、年頃の娘の一群

が降りてくるのに出合った。みな申し合わせたようにけばけばしい洋服を着用して、顔はドーランでも塗ったような厚化粧、おまけにアイシャドウにつけまつげといういでたちは、羊の群が遊ぶ草原にはおよそそぐわぬいものがあった。連れの外人もあきれて「あれらは何者であるか」と、質問するほどであった。私も素性がさっぱりわからないので「あれらはモンスター（化物）である」と答えるのはなかつた。

およそ女の一生のうちで十七、八の娘時代は他のいずれの時代にも見られない、自然美をもっともよく發揮する時代である。何もわざわざ、かけがえのない自然美のみならず破壊するのは愚の骨頂である。この

とき、私はとっさに自然保護は山川草木、禽獸魚虫のみではなく、人類にもおよぼす必要を感じた。

§

一般に自然保護といえば、森林の乱伐、ダム建設、観光道路や観光施設の開発などによる自然の破壊、さらに、心ない観光客などの自然の損傷などに関する問題に重点がおかれているようである。しかし、台風、洪水、山崩れ、雪崩れ、津波などの天災に対する施策もさることながら、他に二つの重大な問題のあることを見のがすわけにはゆかない。

第一に都会の膨脹、工業の進展、交通の発達にともなつて、もろもろの生物は棲息場所を侵害され、さらに工場などからの有毒廃棄物、交通機関の排気ガス、また農作物や森林を加害する害虫、病菌の防除のために使用する農薬などの、いわゆる公害の

ために、知らず知らずのうちにいかに自然がそこなわれつつあるかに留意する必要がある。

農薬禍については、今次大戦前より一部の学者は関心を持っていたが、その被害があまりいちじるしくなかつたので、社会問題にはならなかつた。ところが、今次大戦中から強力な新農薬が数多く出現して、農地、果樹園、森林などに、多量にしかも無定見に散布するようになってからさまざまの障害が生じて、いまや真刻な社会問題となるにいたつた。

農薬界に新たに登場した有機塩素殺虫剤（DDT、BHC、その他）、有機燐殺虫剤（パラチオン、マラリン、その他）、また有機水銀殺菌剤などは戦前の農薬にくらべて、はるかに毒性が強く、目的とする以外の生物にも強く作用して、きわめて危険なものばかりである。

これらの毒性の強い新農薬を連続的に散布すると、次第に人体に蓄積され、諸器官を犯して健康が害される。また不妊の原因となり、母体から胎児に移行した場合には子孫に悪影響を与える。さらに、発ガン物質である公算も大きい。人間ばかりでなく家畜その他にも作用して、直接、間接にわれわれの生活をおびやかす。水田に散布した農薬が川に流れこんで魚類を殺し、さらに湖や海にはいつて魚貝類に悪影響をおよぼして、漁民の死活問題にまで発展する。

訪花昆虫類も新農薬散布のために減少して農作物、果樹などの受精作用が阻害され、減収の原因ともなる。

農薬禍は国民の保健、産業上の面ばかりでなく、自然界にも悪影響をおよぼしていることを見のがすわけにはゆかない。もろもろの生物は決しておのおの独立して生活しているのではなく、相互に依存しつつ、

食物環をつくって生活している。各生物はそれぞれ他の生物(天敵)によって繁殖が抑圧され、おのおの所を得て共存共栄する。このように、バランスが保持されてこそ、自然界は安泰である。

昨今のように、広い地域に毎年多量な殺虫剤を散布すると、目的とする害虫を一時的に防除することはできるとしても、ほかの生物にも悪影響をおよぼして、バランスが乱され、自然界は大きく変化する。そして生物相はますます単純になってカーソン女史のいうように、春になつても鳥も鳴かない無味乾燥な世界が現出することになる。農薬禍はもちろん、自然保護の立場からのみ論ずべきものではなく、もっと広い立場から対処すべきであるが、自然保護の見地からもじゅうぶん関心を持つ必要がある。

農薬禍については、一九六二年にアメリカのレチュール・カーソン女史が「Silent Spring」と題して一書を出版して、農業が人間社会や自然界に、いかに恐ろしい弊害をもたらすかについて警告している。「ちなみに、本書は「生と死の妙薬」という奇妙な題名で邦訳が出版されている」。

この一書が出版されると米国民に大きな反響を呼び、ついに国会の問題にまで進展して、政府は特別な措置を講ずる段階に達した。わが国でも次第に農薬禍に対する関

心が高まって来たとはいうものの、いまだ道遠しの感がある。国民の保健、国土の安泰をはかるためには農薬をはじめとして、あらゆる公害に対して、より強力にして適切な施策が望ましい。

§

つぎに問題となるのは、有害動植物の侵入に対する脅威である。人類は有害生物の侵入によって、いままでも数多くの苦しい経験を持っている。ペスト、コレラ、インフルエンザなどの病原菌が他国からはいって大恐慌を起こすのもその例である。中世紀にヨーロッパを恐怖のどん底におとし入れた疫病の大流行、いわゆる「Black Death」は史上に名高い。最近わが国で、コレラ菌の侵入を防疫陣の必死の活躍で阻止したのも記憶に新しいことである。

病原微生物ばかりでなく、害虫が侵入して大発生を起こして、森林や農作物がいちじらしい被害を受けていることは、世界の各地から知られている。特にアメリカ合衆国やカナダのような新開地では、侵入害虫による被害がいちじらしく、年々莫大な損失をこうむり、また、自然がそこなわれている。昨今わが国では、関東地方に侵入して大発生を起こしたアメリカシロヒトリの防除に苦心していることが新聞紙上に大きく報ぜられている。

§

雑草が侵入して在来の植物を駆逐して、大繁殖を起こした例も世界各地から知られている。たとえば、オーストラリアではウチワシヤポテン類が侵入して野外に土着し次第に森林、農地、牧場を犯して各地にシヤポテンのジャングルが出現した。一九二五年には最高頂に達して、驚くなけれ二四〇、〇〇〇平方キロ、実にわが国の本州、四国を合わせたほどの面積に自生するようになり、オーストラリアの自然は、一変するのではないかとさえ懸念されるにいたつた。

政府はこの防除に乗り出し、シヤポテン類の原産地である南北アメリカ大陸から、シヤポテンの有力な天敵(メイガ科に属するシヤポテンを食べる昆虫)を輸入放飼して防圧に成功した。そして、オーストラリアは、シヤポテンの脅威からのがれることができた。

最近北海道では、侵入帰化植物であるオオハシゴソウ(よく鉄道沿線に黄色い花をつけているのが見られる)がはびこって各地で、植物景観を変えているのが目につく。この植物は、繁殖力がきわめて強いので、自然保護のうえからじゅうぶん警戒を要するものと思われる。

有害動植物の侵入は、衛生保健や農林業

上に大害をもたらすとともに、自然界をも大きく変える懸念が多分にあるので、自然保護の見地からも用心が肝要である。一九五八年に英国の碩学、C・エルトン博士は「The Ecology of Invasions by Animals and Plants」と題して一書を出版した。

その冒頭で、人類はいまや何時爆発を起すか予断を許さない危険な世界に苦悶していると喝破し、さらに確かに核爆発や戦争は、その最悪の部類にはいるべきものであるが、他に勝るとも劣らぬ病原微生物、有害動物、雑草など、生物爆弾の侵入の脅威を忘れてはならない、と警告している。同博士は、世界各地における各種の侵入有害生物の動向、人類や自然におよぼした悪影響を検討して、いかに有害生物の侵入阻止の重要なかを強調している。

§

侵入有害生物の問題も、公害問題と同様に、国家的に広く各関係機関が一丸となつて対処すべきものであるが、自然保護の見地からも、決してゆるがせにできない問題であることを痛感する次第である。

(北大農学部教授)